

フキノトウになつた女おんなの子こ

——オイナカムイの妹いもうとが語かたつた物語ものがたり

わたしは、勇敢なオイナカムイの妹。針仕事が好きで女の子です。いつも刺繡をしながら、父と、母と、そして、兄のオイナカムイとともに、天の世界で、しずかに暮らしておりました。

ある日、わたしは、さみしくなつて、針の手を休めて、地上をみると、どうでしょう！そこには、はるばると大地が広がっていたのです。

人間たちがすむ世界、アイヌモシリです。

その美しいこと、すばらしいこと！

どこまでもつづく、ふかいふかい緑の森に、きらきらと光る、白い川が流れ、川ぞいには、ぽつりぽつりと、人間たちの村であるコタンも見えます。

ああ、なんてすてきなんでしょう！

わたしは、どうしても地上に行きたくなり、さつそく、出かけるしたくをしました。自分でぬつた着物のなかでも、

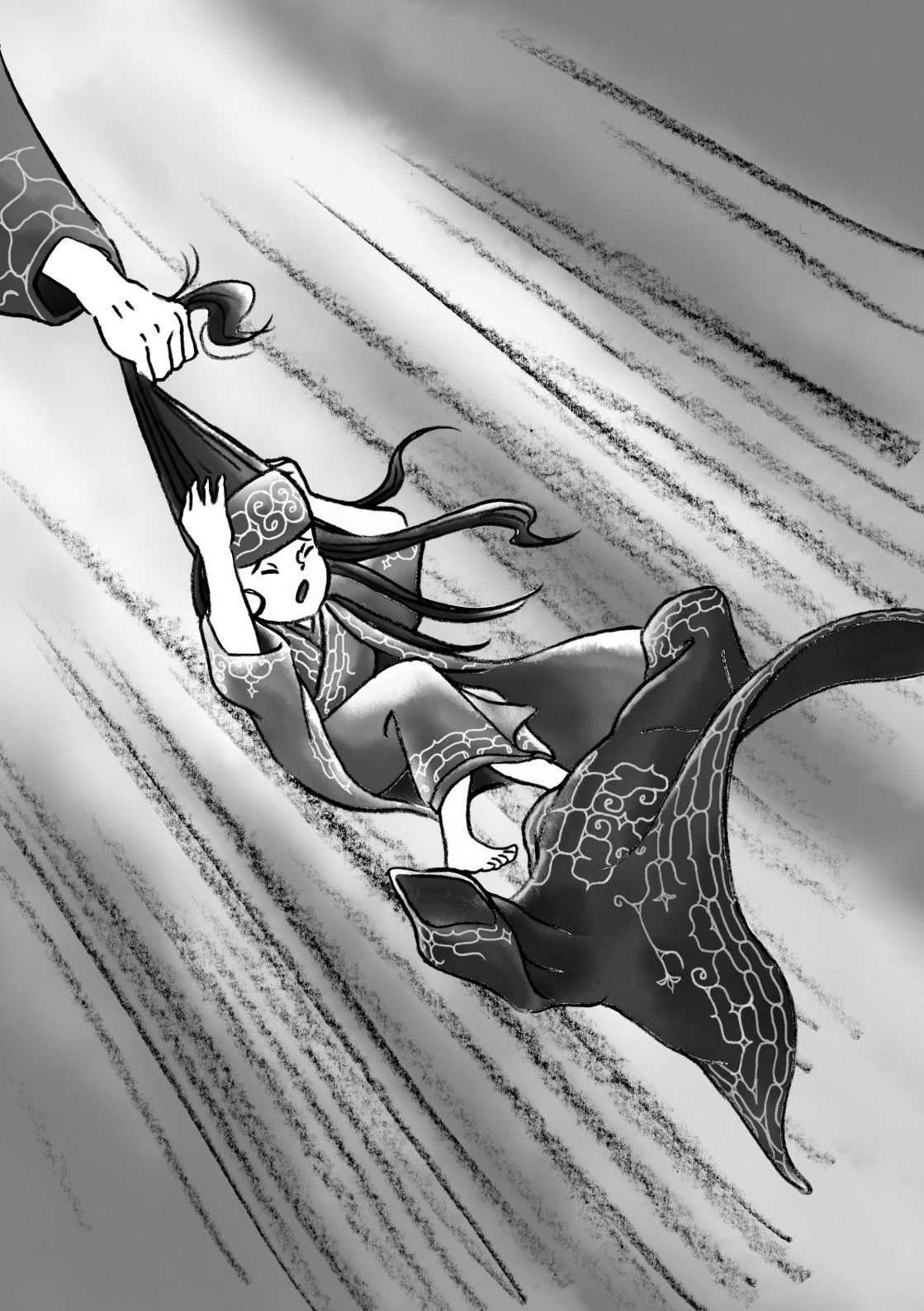
とくにきれいな着物をえらび、なん枚も重ねて着ました。

そして、外へと飛びだし、空を飛んで、山のいただきに、ふわりと降りたつたのです。





ああ、なんときれいな、アイヌモシリの景色！
うれしさのあまり、わたしは踊りだしました。
身も心もひとつになって、二つの舞をし、三つの舞をして、
くるくる、くるくると、舞いつづけました。
すると、わたしの指さきから強い風がおこり、
はるばると大地を吹きぬけて地面をけずり、海まで白く波立てたのです。
はっと、われにかえると、なんとということでしょう。
アイヌモシリのコタンは、
みんな、めちやめちやになってしまいました。



ああ、とんでもないことをしてしまつたと、
まっさおになりましたが、もうどうしようもありません。
わたしは、にげるようにアイヌモシリを去り、
天の世界へ飛んでかえると、頭から着物をかぶつて、
家にかくれて、ただただ、ふるえていました。
すると、アイヌモシリのあちこちから、
つぎつぎに伝言が届いたのです。

「オイナカムイの妹が、アイヌモシリのコタンをめちやめちやにした」
「オイナカムイの妹に、家も、なにもかも、こわされてしまつた」と。

それを聞いた兄のオイナカムイの
怒つたことといたら、ありません。
いきなり、わたしの長い髪をつかみ、
家から引きずりだすと、髪を手に巻きつけて、
わたしをぶんぶん、ふりまわしたのです。
わたしは、太い木の幹にぶつかつて、
そのまま、すうつと気が遠くなつてしまいました。

気がつくと、わたしは、死んでいました。
そして、悪い行いをした者の行く地下の世界、
それも、地下の地下の地下の地下の地下、
六重の地獄の底に落とされていたのです。



わたしは、つらくてつらくて、泣きつづけました。
どうにかして、天の世界に帰りたいわたしは、
父と母に会いたいと、
泣きながら願いつづけ、もがきつづけました。
夏の年六年と、冬の年六年、泣きつづけ、もがきつづけると、
とうとう、六重の地獄を突きぬけて、
ようやく、地上へと顔を出すことができました。
よろこんだのも、つかのま、自分の姿を見ると、
わたしは、なんと、フキノトウになっていたのです。

だから、わたしはこうして、
泣きながら、アイヌモシリで暮らしているのです。
大地と海を荒らした罰として、
小さなフキノトウの姿になつて。

ですから、アイヌの神であるカムイたちよ、
どうか、アイヌモシリを荒らさないでください。
ほんとうなら、天の世界で、
父や母や兄といっしょに、

しあわせに暮らせたはずのカムイであるわたしが、
大地と海を荒らした罪のせいで、
こんな姿になつて、
さみしく暮らしているのですから。

と、オイナカムイの妹が語りました。

